

# 学習者の興味関心を惹く古典の授業構成について

言語文化サブプログラム国語分野

山田飛鳥

【指導教員】 飯泉健司 池上尚 山本良

【キーワード】 古典教育 古文嫌い 暗記 解釈

## 1. はじめに

本研究は、学校教育現場における、国語科古典分野授業の構成を、より学習者の興味関心を惹くようなものにする方法についての新たな知見を得るために臨んだ研究である。具体的には学習者が「古典嫌い」になることなく、新しい見方考え方を、古典を学ぶ中で獲得するプロセス構築を目指すためのものだ。そのために学校教育現場における古典、とりわけ古文の授業展開に課題意識を持って研究に臨んだ。

学習指導要領における古典の目標は「(2)論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、古典などを通した先人のものの見方、感じ方、考え方との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。」(文部科学省 平成30年告示 p.45)とされている。古典を学んだ先にある目標は、学習者の中にある論理能力の育成と共に、感受性と言語運用能力を伸ばすことにあるのだ。なお、ここでの学習者とは、学校で「古典」を勉強する中高生の年代を指す。

また、2019年に明星大学で行われた「古典は本当に必要なのか」、2020年にICU高校で行われた「高校に古典は本当に必要何か」の両シンポジウムにもあるように、古典は学校教育に本当に必要なのか議論の的になっている。そんな昨今においてだからこそ、まず学習者自身に「古典」が楽しいと感じてもらうことが必要になってくると考える。

## 2. 「古文嫌い」とは

今回の研究の目的は、「古文嫌い」をいかに緩和できるかであり、そのためには「古文嫌い」を正しく定義することが必要になってくる。平成27年に文科省が行った学習意識調査(表1)によれば、中学生に対しての「古典は好きか」という質問に対して「どちらかといえば、当てはまらない」「当てはまらない」と答えた割合は69.9%、高校生に対しての「古文は好きか」という質問に対して「どちらかといえば、そう思わない」「そう思わない」と答えた割合は71.2%となっている。中学生に関しては「古典」として聞いているので、古文に限られた話ではない。ただ、高校生に着目すれば過半数を超えているどころか、約70%が「古文嫌い」であるという結果になっている。30人で1クラスなら、そのうち21人は「古文」に対して後ろ向きな気持ちで取り組んでいることになる。このように、「古文嫌い」が過半数を占める中で、こうした「古文嫌い」はなぜ起こってしまうのか?約1600人の高校生を対象に、いいずな書店が2020年に行ったアンケート結果(以後「アンケート①」と記す)の中に其の指針が示されている。(このアンケートでは「古典」としてアンケ

ートを行っている)その中で、重要だと思った項目を以下にまとめる。

・「国語の学習に悩みはありますか?」という問いに対して「はい」と答えた回答者のうち、各学年で「古典」に対する回答内容が多かったもの。

高校1年生:できない。苦戦。つまらない。ねむくなる。

高校2年生:勉強法わからない。基礎からわからない。理解できない。

高校3年生:苦手。読めない。伸びない。分からない。難しい。できない。

・「大学入試を意識して古文の学習をすることはありますか?あれば、どのようにしているかご記入ください」に対しての各学年で回答内容が多かったもの

高校1年生:単語

高校2年生:文法

高校3年生:単語

・「国語全般について思うこと、困っていること、要望などがあれば自由にご記入ください。」

高校1年生:古典 ドリル欲しい。興味ない。面白くない。

高校2年生:古典 基礎。単語。文法。ドリル教材。何のためにやるのか。

高校3年生:勉強の方法

(いいずな書店モニター室, 2020年)

このアンケートでは、高校1年生時点で「現代文の読解が苦手」というのが一番多い回答だったのに対し、高校2年生時になると「古典の基礎が分からない」が最多回答項目に変わってしまっている。また、古典の勉強において「単語」と「文法」が苦手のきっかけになってしまっていることが読み取れるが、それは高校1年生段階での「古典がつまらない」から始まっていると考えられる。「古典がつまらない」から勉強をせず、「単語」「文法」に苦手意識があり、その結果が、3年生時点でも「単語」が「大学入試において意識すること」の圧倒的な最多回答になってしまっていると考えられる。また、ICU高校で「高校に古典は本当に必要なのか」と題されたシンポジウムが行われた。そこで現役高校生1652人(国公立・私立あわせて10校)に行ったアンケート(以下「アンケート②」と記す)とで以下のような質問とそれに対する代表的な回答が挙げられている。(勝又基 2020年明星大学)

質問:古典の授業について、嫌なところを教えてください  
回答:

・文法とか単語とか覚えるのがめんどくさい。

- ・そもそも古典を勉強する必要性が分からない
- ・とにかく読めない。覚えることが多い。(単語、文法)
- ・現代と同じ読み方をするのに違う意味でややこしい。文法が異なっているのに説明が少ない。
- ・将来使うことがないし、役に立たない。

(ICU 高校 2020 年)

が挙げられた。上記のアンケートも踏まえて考えると、「古文嫌い」は「つまらなさ」の根本にある「古典の授業について嫌なところ」を解消することで「つまらなさ」が緩和されると定義することができる。

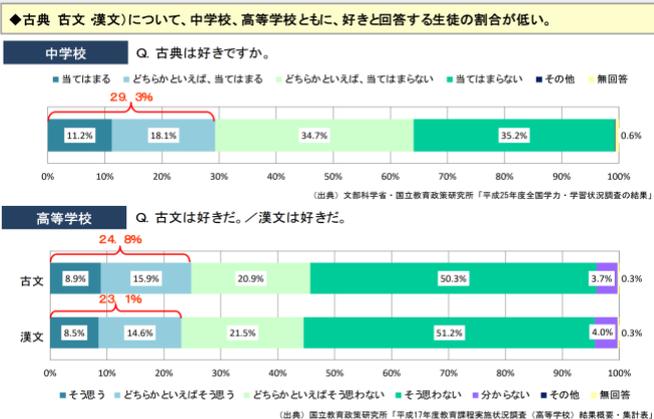


表1 文部科学省 国語に関する資料 平成27年11月19日

### 3. 方法設定: 「つまらなさ」の解消

先に述べた通り、「古文嫌い」を解消するために最も有効なのは「つまらなさ」の解消であると考えられる。ただ、「つまらなさ」とは非常に抽象的な表現である。重要なのは、「つまらなさ」の根源にあるものを考えることであり、それはアンケート②の結果から読み取ることが可能だ。アンケート②の結果を見ると、「単語」「文法」に対してより良い暗記の方法を提案すること、そしてその先の読解に進むこと、その読解において様々な角度から、「読み」を促すことが「つまらなさ」の解消に有効だと言える。本研究は、その2つの事項に的を絞ってその方法論を提案していく。

### 4. 「単語」と「文法」の暗記

まず「単語」「文法」をどのように授業内で展開していくと、学習者にとって心理的ハードルが高くなるのかについて考えていく。

#### 4.1. 「単語」のグルーピング化と核の理解

「単語」と聞くと、真っ先に「暗記」という言葉が思い浮かぶだろう。私自身も高校生時代に単語テストがあり、そのために嫌々ながら覚えていた記憶がある。では、そもそもなぜ古文単語は暗記することを嫌がられるのだろうか。その答えはいたってシンプルで「めんどくさい」からである。そもそも暗記自体を「めんどくさがらない」生徒の方が少数派であると思うが、古文単語に限ってはその特異性に「めんどくささ」の根源がある。古文単語の中でもいくつか種類分けが可能であると考えており、それを以下に記す。

- 1、現古同音同義語(現代の言葉と同じ発音で同じ意味の単語)

- 2、現古同音異義語(現代の言葉と同じ発音で違う意味の単語)
- 3、古語特有語(現代の言葉には存在せず、古文にしかない単語)

アンケート②の結果からわかるとおり、学習者にとって厄介なのは上記の内の2であると考えられる。古文単語は、当たり前のことであるが、昔の日本で読み書きされていた言語である。それゆえに、同じ発音だとしてもその時々々の社会背景、使用状況の変遷で意味が異なるものがある。さらに頭を悩ませるのは、現代語と同じ意味も持ちつつ、意味が変わることがあることだ。例えば、「いとほし」という単語は、現代語での「いとおいしい」とほぼ同じ発音を持つ。現代語で「いとおいしい」は一般的に「かわいい」という意味を持つ。しかし、桐原書店出版の古文単語帳「読んで見て聞いて覚える古文単語315」において「いとほし」は「愛しい・かわいい」よりも「気の毒だ・かわいそうだ」と書いてある。ここに学習者が古文単語に混乱し、苦手意識を持つ原因があると考えられる。そこに対してより良い暗記方法を提案することが今節における意義である。

では、どのようにして授業内でこの課題を解決するのか、私はグルーピング化と意味の核を捉えることが重要だと考える。まずは、グルーピング化についてだが、三宮真智子氏は著書「メタ認知で〈学ぶ力〉を高める」の中で効果的な学習方法の一つとして、「バラバラの記号や単語はストーリーにすると覚えやすい」と述べている。著書内では化学のイオン化列を例にとって、「ストーリー仕立てにすることで記憶の負荷が小さくなる」ことを指摘している。これは古文単語にも応用可能である。例えば、古文単語には「おこたる」「ためらふ」「なやむ」という3つの単語がある。それぞれの意味は「病気が治る」「静養する」「病気になる」であり、バラバラになるとそれぞれを個別で覚えなければならない。そこで「悩んで、ためらって、おこたった」という一連の流れを作っていくと、「病気になったけど、安静にしていたら、病気が治った」というストーリーが出来上がる。実際に、私が教えてきた経験の中でも、1語に対してそのまま1つの意味を単純暗記している学習者は多かった。だからこそ、これを授業中に組み込んでいき、学習者に「ストーリーで覚えること」を意識させることができれば、「単語」の苦手解消の一助になるのではないかと考える。ただ、すべてがストーリー形式でまとめられるわけではない。そうなった時に必要なのが、「核となる意味を覚える」ことである。先の例に出てきた「いとほし」であれば、なぜ「かわいそうだ」と「かわいい」が意味として共存するのか。それは「かわいそうだ」の意味のほうが先に用いられていた背景がある。「気の毒だ」と同情していたところから「かわいい・いとおいしい」と愛情へ変わっていった経緯がある。だから、現在において2つの相反するかのように見える意味が、単語帳に掲載されているわけであるが、これも1つのストーリー化である。また、今回例に挙げた「いとほし」のストーリーは単語帳自体にも載っているものであるが、もし載っていないものが

あったとしても、学習者自身がストーリー化するきっかけを作ることが重要である。そこにおいてはその覚え方が歴史的に正しいのかは問題ではなく、学習者自身が「単語」に対して少しでも苦手意識をなくしていくことが最優先である。まとめると、「単語」に対する苦手意識は「グルーピング化」と「核となる意味を覚える」ことで一助とすることができる。

#### 4. 2 「文法」におけるグルーピング化

先では「単語」におけるグルーピング化を考えたが、今度は「文法」におけるグルーピング化について考えていく。「文法」はアンケート①において「単語」ほど顕著ではないが、アンケート②において「単語」と同じように苦手意識があることが分かる。では、「文法」に対してどのような提案が適切なのかだが、アンケート②が行われたシンポジウムでは、「古典の授業について、好きなところを教えてください。」という質問もされている。その質問への代表的な回答例の中に「コツを掴めば一気にわかる所」というのがある。この回答は、「文法」を覚えるとテストにおいて点数が取りやすくなることを指しているが、これが重要だと考える。たとえ外的動機付けに過ぎないとしても、まずは「古典」に対してプラスの感情を持ってもらうことが「古文嫌い」から学習者を遠ざける一因になるからだ。その「コツ」の1つこそ、先節で提案したグルーピング化である。「文法」を教える時、とにかく全暗記の要素が強いと感じている。それは自分自身が学んだ記憶、教えてきた経験から出発しているものでもあるし、実際に「文法書」の多くがその体を成している。そして学校現場では声に出して覚えること、助動詞などの表を丸暗記させることが多い。仮に、教員側がそのような意図で進めていなくとも、学習者はわかりやすい暗記という勉強法に走ってしまう。その証拠にアンケート①では「ドリル教材」が求められているし、アンケート②では「覚えることが多い」が古典の嫌なところとして挙げられてしまっている。以上のことから「文法」を効率よく暗記するためのグルーピング化は必要だと考える。

「文法」におけるグルーピング化とはどのようなことを指すのかを考えていくと、それは「用言」の段階での暗記を徹底することにたどり着く。暗記が嫌な学習者にとりあえず暗記させることほど本末転倒なことはないと思うが、これには理由がある。「用言」段階での暗記を徹底し、理解を深めることは、その後の文法学習において非常に重要な基礎となるということだ。「用言」とは動詞・形容詞・形容動詞を指す。学習者が暗記するのに苦労する「助動詞」は、これは活用語(文章に合わせて形を変える必要がある語)であり、そのほとんどは「用言」と同じ形をしている。例えば「過去」の意味を持つ助動詞「けり」はいわゆる「ラ変動詞」と同じ活用だから6つある活用形を覚えなくとも「ラ変と同じ」と覚えれば少ない労力で覚えることが可能である。(初見段階での想定のためこの場合に活用しない部分は考慮しない)そして、その「けり」と同じ活用をする助動詞は他にもあり、それらをグルーピング化することで一気に知識に

なる。だから、「用言」を徹底して暗記することが、少なくとも助動詞の活用において暗記の量を減らすと考えられるのだ。

#### 5. 「読解」への接続

ここまで述べてきたことは、あくまで「古文嫌い」を緩和するための初歩段階での提案である。アンケート①で挙げられた「単語」「文法」への苦手意識を解決できたとしても本題である「古文嫌い」は解消できない。なぜなら、同アンケートの中で「つまらない」「面白くない」「何のためにやるのかわからない」等の回答結果があり、それはアンケート②においても同様である。根本から「古文嫌い」を解決するなら、「読解」に面白み・意味を見出してもらうことが必須である。そこで、学習指導要領が掲げる古典の目標や、ICU高校で行われたシンポジウムにおけるアンケート②以外の回答結果、実地研究の授業実践から得た知見等を活かして、学習者を「読解」へ接続する方法について提案してく。

##### 5. 1. 現代とのつながり

古文がつまらなくなる原因としてまず挙げられるのは、現代とのつながりが薄いことだと考える。古文で提示される文章内での価値観は、現代の価値観とは全く異なるかのように見える。それが学習者の興味を削ぎ、関心を奪っていく可能性が高い。そもそも古文の中でも世間で名の知れたものは平安時代を中心に展開されていることが多い。例えば、かぐや姫に代表される『竹取物語』、3大歌物語の一つである『伊勢物語』、日本国内のみならず、海外でも著名な『源氏物語』、これらは全て平安時代の文学である。その時点で現代とは約1000年の隔りがある。もちろん、『奥の細道』などの平安時代以降、近世の文学も知られてはいるがそれでも圧倒的に平安期に寄ったものが多い。これは学校教科書においても同様のことが言える。東京都教育委員会が発表している令和5年度に「古典探究」において最も採択された教科書は大修館出版のものであった。その目次から教科書内で扱われている文章の成立年代分けをしてみると、上代が1、平安が14、鎌倉が13、室町が2、江戸が8となっている。なお、今回は巻末や読み比べのために収録されているものは除いた。このように、平安時代成立の文学が最も多く収録されている。また、『平家物語』のように鎌倉時代に成立したものでも内容は平安時代末期のものもある。もちろん、成立年代は現在定義づけられているものであり、曖昧な題材もあるが、それでも1000年代前半に成立した作品が多いと言って問題ないだろう。これらの数値が示すことは、学校現場において生徒は約500年以上前~1000年前の文章を学ぶことが多いということである。その隔りや古文を身近なものから遠ざけ、「なんかよくわからないもの」にしてしまっている要因になっていると言っても良いだろう。

では、どのような工夫をすれば古文を身近なものに感じることができるのか。竹村信治氏は著書の中で「映画、TV、ビデオ、漫画、アニメ、音楽の歌詞。それらは教科書の古典教材よりももっと複雑な人間関係とそこでの

心の葛藤をとりあげ、人間の生や社会への観念的だが切実な問いを、視るもの聴くものになげかけています。そうした世界に日頃ふれている生徒たちが、古典の世界を前にして「しらけるような恋の話ばかり」「話自体に興味を持たない」と思うのは当然ではないでしょうか(竹村 2003 年)と指摘している。ここから推測されることは、文章自体が古文の形を取っていても内容を限りなく現代に近づけること、または置き換えることによって学習者の興味関心を惹くことが可能なのではないかということだ。ここでは、学習者に嫌厭されがちな和歌を含む文章を例に挙げて考えていく。例として用いるのは、先にあげた平安時代の日記文学である『和泉式部日記』である。

〈本文〉

あはれにもものおぼゆるほどに来たれば、「などか久しく見えざりつる。遠ざかる昔のなごりにも思ふを」などいはすれば、「『そのこととさぶらはでは、馴れなれしきさまにや』とつつまじうさぶらふうちに、日ごろは山寺にまかり歩いてなむ、いとたよりなくつれづれに思ひたまうらるれば、『御かはりにも見たてまつらむ』とてなむ、師の宮に参りてさぶらふ」と語る。「いとよきことにこそあなれ。その宮は、いとあてにけけしうおはしますなるは、昔のやうにはえしもあらじ」など言へば、「しかおはしませど、いと気近くおはしまして、『つねに参るや』と問はせおはしまして、『参り侍り』と申しさぶらひつれば、『これもて参りて、いかが見給ふ、とてたてまつらせよ』とのたまはせつる」とて、橘の花をとり出でたれば、「昔の人の」と言はれて、「さらば参りなむ。いかが聞こえさすべき」と言へば、ことばにて聞えさせむもかたはらいたくて、「なにかは、あだあだしくもまだ聞え給はぬを、はかなきことをも」と思ひて、薫る香によそふるよりはほととぎす聞かばや同じ声やしたると

と聞こえさせたり。まだ端におはしましけるに、この童隠れの方に気色ばみけるけはひを御覧じつけて、「いかに」と問はせたまふに、御ふみをさし出でたれば、御覧じて、

同じ枝に鳴きつつをりしほととぎす声は変らぬものと知らずや

と書かせたまひて、「賜ふ」とて、「かかること、ゆめ人に言ふな。すぎがましきやうなり」とて、入らせたまひぬ。

〈現代語訳〉

しみじみとも思われる頃にやって来たので、「どうして長い間来なかったの。遠ざかっていく昔の寄り方とも思っているのに」などと言わせたところ、「『取り立てて用事がございませぬでは、馴れ馴れしいようでは』とご遠慮いたしておりますうちに、この頃は山寺に出歩いておりましたので。ほんとうにすぎるところもなく、気の紛れもなく存じましたので、『亡き宮様の御身代わり

にお仕し申し上げよう』ということで、帥宮様のもとに参じてお仕えしております。」と語る。「たいへんよいことだわ。その宮様はとても気高くよそよそしくおいでになるようだけれど。前の宮様のようにではないでしょう」というと、「そのようではいらっしやいますけれども、たいへん親しみやすくおいでになりまして、『いつも伺っているのか』とお尋ねになりまして、『お伺いしております』と申し上げましたところ、『これを持って伺って、どうぞ覧になりますかと差し上げるように』と仰せになりました。」といて、橘の花を取り出したので、思わず、「昔の人の」といった古歌が口をついて出てきてしまつて。「それでは帰参しましょう。どう申し上げたらよいでしょう。」というから、伝言申し上げるのも気恥ずかしいので、「いやなに、浮気っぽくもまだ評判になっておいでではないので、ちょっとした歌くらい…」と思つて、

橘の花の薫る香にことよせるよりは、ほととぎすよ、おきしたものです。兄宮様と同じ声をなさっているかどうかを

と申し上げさせた。

宮はまだ邸の端の簀子敷にいらっしやつたのだが、この童が物陰で様子ありげな動きをするのをお見付けになつて、「どうだったのか」とお尋ねになるので、お手紙を差し出したところ、ご覧になつて、

兄弟として同じ枝で泣いておりましたほととぎすですから、変わらないものとご存じないのでしょうか。とお書きになられて、「お与えになる」ということで、「こんなことは絶対に人にいつてはいけぬ。好色めいているようだから」と、おっしゃつて、部屋の中にお入りになつた。

(2025 年笠間書院出版 『和泉式部日記』 小谷野純一著より引用)

この文章は、登場人物である「女」が亡き恋人を尊親王を偲んで物思いに更けているところに、小舎人童が訪ねてくるという場面である。そこで訪ねてきた小舎人童は亡き恋人を尊親王の弟敦道親王に仕えていたのだ。そして、その敦道親王から預かった橘の花を渡すところから話が展開していく。確かにこれでは長いし、わかりづらい。そして古文特有に見える行動描写もある。だが、これを現代風に置き換えることができたならどうなるだろうか。これは恋愛ドラマとして提示できたなら、少しでも身近に感じることはできないだろうか。元恋人の弟が自分に対して好意を持って近づいてくる、そして仲介役の人物を通して自分を試してくるような発言をする。コミュニケーションツールは、SNS であり、仲介役の小舎人童は共通の知り合いになるだろう。そして「橘の～」から始まる和歌のやりとりは、いわゆる「恋の駆け引き」となる。先にあげた文章の中には、敦道親王が「女」に対して橘の花を見せることで、「五月待つ花橘の香をかげば 昔の人の 袖の香ぞする」という

和歌が出てくるかを試す描写がある。これは現代的に言う「カマをかけている」行動であり、「返答面白いかな」程度の感覚で良いだろう。そして最後の「好き者めいて見えるから誰にもこのことは言うな」という一文は「チャラいみたいに思われんの嫌だから、このことは内緒な」といったセリフに代用可能だと思われる。もちろん、これらの設定やセリフの意図には穴が多いことも重々承知である。先の竹村氏も言及しているように、現代における娯楽やコンテンツは複雑な人間関係や心の葛藤の機微を視聴者に投げかけるものが多い。だが、それらの要素を古文が持ち合わせていないわけではない。問題になるのは先の章で挙げたような、読解の手前にある知識が読解のハードルを上げてしまっているのだ。古文の「つまらなさ」を解消するためには、多少違いが生まれても学習者を引き込むような仕掛けが必要なのである。加えて、近年のネットワーク上のコンテンツは短いものが主流となっている。例えば、youtube 上での長い動画は、再生回数が稼ぎにくい現状にある。端的で手軽に楽しめることが学習者の興味を惹くならば、まずは手軽に全体像を理解することが重要だと考える。そして、現代とのつながりを感じながら解釈の幅を持ってもらうような仕掛けが必要である。

## 5. 2. 「解釈」の幅を持つ

ICU 高校で行われたシンポジウム内でのアンケートにて以下のようなものがあつた。

「現在、古典の授業でやっていないことで、あなたがやってみたいことはありますか？」

これに対して、一番多かった回答内容が

「タブレットなどを利用して当時の体験をする」

だった。これは円グラフの中で「ヴァーチャル体験型」という文言でまとめられ、実に 732(回答者の 55.1%)の回答を得ている。このアンケート結果は「古文嫌い」の緩和のためには非常に重要なものだと考える。さらに、日本学術会議が 2020 年に提言した「高校国語教育の改善に向けて」の中では、「せつかく魅力的な「言語文化」と 1 年次で出会っても継続性がない。受験用と考えてしまっただけではこれまでも変わらない。教師も生徒も楽しく面白いと思えるような授業へと、発想自体の転換が必要である。」と述べられている。同時に「方向性のみ示せば、それは「リテラシーを育成するための科目」としての意味付けが考えられる。古典は、我が国の言語であり文化であるが、また学習者にとっては、半ば異言語であり、半ば異文化である。逆にいえば、異言語・異文化を知る学びの訓練となる。」(2020 年 日本学術会議 p.9.10) つまり、これまでの受験のための暗記偏重型の古文が、学習者を「古文嫌い」にしてしまったと考える。もちろん、単語、文法を理解し暗記することが読解への足掛かりであり、重要な素地となる。しかし、それだけでは「古文嫌い」を加速するのみとなり、現状の解決はない。そこでタブレット等の ICT を活用し、解釈の幅を持つような活動が必要なのではないかと考えた。そしてこれは、私自身が課題に感じ

てきた古典と ICT 活用を繋ぐ架け橋になり得ると感じている。

以上の課題に対して私が具体的に提案したいのは、「プレゼンテーション形式での古文ドラマ作り」である。プレゼンテーション自体は特別目新しくなく、昨今の中高生なら日常的に行っていることである。ただ、ここで重要なのは「ドラマを作る」という行為そのものである。もちろん大筋はこちらから提示するが、それ以外のセリフや場面設定は学習者自身が決めて発表する。各々の作品理解があり、解釈が存在することを活かし、様々な角度から古文を見るのである。これは先の節にある「現代とのつながり」にも通ずる部分があり、古文を身近に感じる仕掛けになり得る。あくまでこれは提案であり一例でしかないが、シンポジウムのアンケートや、先の学術会議の提言を鑑みるに学習者自身が古文の世界を考え、感じ、表現していく活動として有効なものになり得ると考える。私自身に実践例がなく、ここでは提案のみで終わってしまうが、実践は来年度以降への課題とする。

## 5. 3. 「生涯読書」と「比較」という視点

### 実地研究の授業実践から

昨年度、今年度と併せて 2 度実地研究に行かせていただく中で、授業実践を行う機会をいただけた。その授業実践で学んだこと、経験したことから考察していく。授業実践の詳細は以下の通りである。

学校：東京都内の公立高(以下 A 高校とする)

学年：3 年生

対象：大学受験において「古典」を用いない生徒

授業名：古典教養

授業内容：

- (1) 「竹取物語を知ろう」(『竹取物語』より)
- (2) 「恋の価値観を知ろう」(『蜻蛉日記』『和泉式部日記』より)

A 高校では高校 3 年時の自由選択科目で「古典教養」という科目を今年度より設定している。週に 1 日 2 時間続きで行われる。この「古典教養」を選択する生徒は、大学受験で「古典」を用いず、いわゆる「卒業のための単位」として選択している生徒が主である。つまり、「古典は別に好きじゃないけど、選択している」ことが多い。授業構成を考える中で、軸にしたのは「作品の背景」「人物像」である。授業を行わせていただくことになった時、担当の教員からは「古典を楽しむ」ことがコンセプトであり、将来的に少しでも「古典を楽しむ」ための授業ができるきっかけになってほしい、と伝えられた。そこで私が考えたことは「意外と知らない」と「現代とあんまり変わらない」を感じてもらおうことだった。これは 5.1 で挙げた「現代とのつながり」、5.2 で挙げた「解釈の幅を持つ」に通ずるものだと考える。だからこそこの授業では、現代語訳が中心であり、文法事項は表現に関わりのある部分にとどめ、文章の背景にある前提と、登場人物像にスポットライトを当て、「古文を楽しんでもらう」ことを重視した。

まず 1 回目の授業である『竹取物語』であるが、具体的な

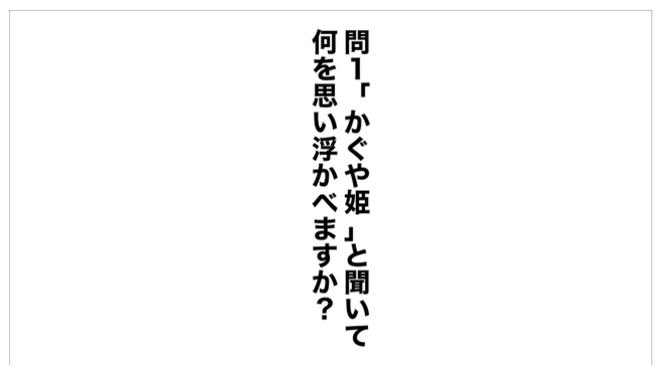
内容はかぐや姫が 5 人の求婚者から結婚を迫られる場面である。この場面設定の意図は、絵本などで登場するかぐや姫と実際の竹取物語内のかぐや姫の違いを認識してもらうためである。その違いとは「意外と強気な性格」である。5 人の求婚者はかぐや姫に求婚するが、かぐや姫からは達成不可能な要求が出る。当時の航海技術では到達不可能な天竺(インド)にある仏の御石の鉢、中国の伝説にある存在しない蓬莱にある玉の枝、存在しない火鼠の皮衣、空想上の生き物竜の首の珠、生むはずのない燕の子安貝といったものである。当時では名の知れた貴族である 5 人の求婚者は、要求を達成したかのように偽ることや、必死で探すなど、なりふり構わない。ただ、その努力も空しく嘘だということが明るみになる者や、無理な探索を続ける中で負傷する者もあらわれるなど結局惨敗に終わる。そのすべての過程において、かぐや姫は「何とか結婚しない方法はないのか」という姿勢を貫く。ストーリーを通して感じてほしかったことは、このかぐや姫の強気な姿勢である。そのために授業冒頭で『竹取物語』の作品概要を確認した後に「かぐや姫と聞いて何を思い浮かべますか?」という問いを立てた。回答例としては「竹から生まれた」や「月に帰っていく」「かわいい」などが挙げられた。そして授業の最後に感想を聞いた時に出したものは「思ったよりかぐや姫が強気だった」や「一回ぐらい応じてあげても良かったのではないか」「求婚者たちにはもう少し頑張ってもらってほしかった」といった感想が挙がった。ここから浮かび上がってくる重要な視点は「生涯読書」の観点である。これは学習指導要領が示す国語科古典探究の目標「(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。」(平成 30 年告示 文部科学省 p. 45)による。今回の授業実践の中で浮かび上がった「生涯読書」の観点は、これまでの人生で触れたことがある文章に対する再認識だった。生徒の最後の感想にあり、人物像に焦点を当てることで見えてくる一面もある。このように学習者自身において解釈の幅を広げることができたならば、古文に対するこれまでのマイナスな印象が緩和されていくのではないかと考える。

そしてこの授業においてももう 1 つ重要な要素となったのは「比較」の観点である。先に述べた授業冒頭の「かぐや姫の印象」への質問の中で「かぐや姫ティンカーベル説」というものが出てきた。正直、この回答が出た時は私自身返答に悩んだのだが、国語分野内で行った「実地研究中間報告会」の中で、それが「比較」の視点につながるのではないかとこの意見が出た。一見すると突飛な意見に思えるが、これはイギリス児童文学の代表例でもある『ピーターパンとウェンディ』における「ティンカーベル」との対比から『竹取物語』を見るチャンスだったのだ。学習指導要領が示す高等学校国語科古典探究「内容 A 読むこと (2)イ」における「同じ題材を取り上げた複数の古典の作品や文章を読み比べ、思想や感情などの共通点や相違点について論述したり発

表したりする活動。」(平成 30 年告示 文部科学省)に近いものがあった。これを起点として、2 回目の授業は『蜻蛉日記』と『和泉式部日記』という「自身の恋愛」という同じ題材をテーマにした日記文学を扱った。



(授業スライド例 1)



(授業スライド例 2)



(授業スライド例 3)

2 回目の授業で重視したことは、「考え方の根本は現代とあまり変わらない」「筆者の恋愛観を通して人生観を見る」ことだった。『蜻蛉日記』は藤原道綱母が書いた日記文学で、夫である藤原兼家との夫婦生活に対する不満が基本的な内容となっている。扱ったのは日記の始まりの部分、兼家が他の女性へ手紙を贈ろうとしていることが発覚した場面、兼家が訪れたが門を開けなかった場面である。道綱母が持つ一種の諦観に触れること、そしてそれが兼家の訪れが遠のいていることが原因であることが読み取ることができるような内容を選んだ。道綱母の持つ諦観は、多分に嫉妬や不満をはらんでおり、それは当時の貴族社会では珍しいものだったのである。なぜなら、道綱母は第 2 夫人であり、正妻でなければ優先されないことが当たり前だったからである。

しかし、これにはある裏話があり、道綱母はもともと第2夫人として結婚したにもかかわらず、第1夫人を差し置いて兼家に一番に愛された経験があるのだ。そして、兼家は新しい相手を見つけ、なかなか道綱母のもとを訪れなくなる、そんな過去があり、道綱母は諦観に沈んでいる。古文の世界の常識の中で、現代と全く相容れないものの中に「一夫多妻」がある。道綱母がこの「一夫多妻」に対して持っていた考え方は、現代と同じだと私は考えている。だからこそこの『蜻蛉日記』を選んだのである。先に述べたような裏話を少し説明し、実際に現代語訳に触れていく、という流れで授業を進めた。この授業終盤で「藤原道綱母はどんな恋愛観を持っていたと考えられるか？」という質問を投げかけた。そこで出た回答例は「気持ちがわかる」や「現代と変わらない恋愛観を持っていた」というものであり、「現代とのつながり」を感じるには十分だった。

2時間続きの2時間目は『和泉式部日記』を取り扱った。その意図は先に出てきた学習指導要領で述べられていた「同じ題材を扱っている複数の古典作品」に触れるためであった。『和泉式部日記』は先の『蜻蛉日記』と異なり、和泉式部とされる登場人物(以後「女」とする)と敦道親王が会ってから10ヶ月を記したものである。その短い作品の中で先の『蜻蛉日記』と同じような場面があり、それが書き出し、敦道親王の訪れに門を開けないという場面である。ただ、場面は似ていても前提の状況が違う。その差異の中で2つの作品を「比較」して共通する感情、異なる部分を見ることを目的とした。この時間においても、終盤に「和泉式部はどんな恋愛観を持っていたか？」という質問をした。そこでこの回答例としては「情熱的な恋愛」や「すれ違いが切ない」等が出た。ここまでは1時間目と同じだが、2時間目の最終質問は「2つの作品を踏まえて感じたことは？」だった。この質問が「比較」をするうえで必要な問いである。ここでの回答例は「1000年前でも、女性の恋の価値観はあまり変わらないと思った」や「もしかして変わっているのは、女性ではなく、男性の価値観なのではないかと思った」がある。これらの回答は2つの作品を「比較」し、共通点を考えた結果に出てきた考え方である。この「比較」という観点は学校採択の教科書においても取り入れられている視点であり、大学共通テストにおいても2つの文章を読み、問いに答える形式がある。特に目新しいことではないが、この「比較」をどのように活かすことが重要である。

上記2回の授業実践を通して、学習者の持つ「古文嫌い」を緩和するためには、「身近さ」という観点が必要だということがより実感できた。学習者の「人生」の中に「古文」という存在が感じられるために、きっかけとしての授業を提供すること、そしてその為の構成を考えていくことが重要な課題となり得る。



(授業スライド例4)

A 藤原道長

?????のお父さんなんです

実は兼家って…

(授業スライド例5)

☆2つの作品を踏まえて感じたことを書こう！

(授業スライド例6)

## 6. 今後の展望

この2年間の研究を通して、「古文嫌い」を解消するためには、何よりも授業構成への工夫が必要であることを再認識した。これから教壇に立つにあたり、様々な角度からの授業・考察を通して、よりよい方法を検討していく。また、今回の研究で得た知見を「古典」に限らず国語科の他の分野においても応用していくことを通して、より良い授業構成を考えていく。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、指導教員である飯泉健司教授に多大なるご指導をいただいたことをここで感謝申し上げます。また、言語系 SP 国語分野の先生方をはじめとした、埼玉大学大学院の先生方にも、授業中含めさまざまな助言をいただきました。ありがとうございました。

## 引用・参考文献

いっずな書店アンケート いっずな書店モニター室 2020年実施

URL: [https://www.iizuna-shoten.com/questionnaire2020\\_high/result/](https://www.iizuna-shoten.com/questionnaire2020_high/result/) 最終閲覧日 2026年1月29日

文部科学省 『学習指導要領』(平成30年告示) 国語編 p.45  
菊野雅之著 『古典教育をオーバーホールする 国語教育史研究と教材研究の視点から』 文学通信社出版 2022年  
荒木浩編 『古典の未来学 Projecting Classicism』 文学通信社出版  
勝又基編 『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた』 文学通信社 2020年  
長谷川凜、丹野 健、内田 花、田川美桜、中村海人、  
神山結衣、小林未来、牧野かれん、仲島ひとみ編 『高校に古典は本当に必要なのか』 文学通信社出版 2021年 p.40,42  
三宮真智子著 『メタ認知で〈学ぶ力〉を高める』 北大路書房出版 2018年 p.95  
武田博幸、鞆森祥悟著 『重要古文単語315—読んで見て聞いて覚える (四訂版新版)』 桐原書店出版 2024年  
竹村信治 「言述論—for 説話集論」 笠間書院出版 2003年  
日本学術会議、言語・文学委員会、古典文化と言語分科会  
『提言 高校国語教育の改善に向けて』 2020年 p.9, 10